



はじめに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 優子, 熊安, 貴美江 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14974

はじめに

ダイバーシティ（多様性）とインクルージョン（包摂）は、現代社会の重要なキーワードのひとつです。かねてより、企業活動では「ダイバーシティ&インクルージョン」の推進がCSR（企業の社会的責任）の重要課題と言われてきましたが、近年はとくに、女性や障がい者、外国人だけでなく、性的マイノリティ／LGBTを含む「より多様な人材」にこれまでにない関心が注がれるようになっていきます。LGBTとは、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーの頭文字を組み合わせた用語です。国内の社会的認知は十分でないものの、2013年あたりから商業誌がLGBT特集を組むようになり、人気ジャーナリストの池上彰氏が2015年の「流行語大賞」候補になるのではと予測したほど、注目されたワードです。

2014（平成26）年7月に改正された男女雇用機会均等法では、セクシュアル・ハラスメントの指針に、同性間で引き起こる問題や、性的マイノリティに対する差別的言動もセクハラになることが明記されました。「LGBT支援宣言」を出した淀川区や那覇市をはじめとして、男女共同参画条例その他で性的指向やジェンダー・アイデンティティを理由とする困難を解消することを謳う地方自治体の数も確実に増えています。さらには、2015（平成27）年11月、渋谷区と世田谷区が「同性パートナーシップ証明書」の交付を始め、国内外のメディアで大きく取り上げられました。またこれに合わせて、携帯電話会社や保険会社などが相次いで新たなサービスを開始し、2016年に入ってから、世田谷区の区役所職員で作る区職員互助会や教職員互助会が同性カップルにも結婚祝い金を出すことが検討されるといった、新しい動きも始まっています。

個人の性のありようが多様であるということは、家族のありようも多様であることを意味します。従来の「標準」は「異性愛者である男女が、法律に認知された関係性のもとで、生物学的なつながりのある子どもを性役割分業によって育てる」という家族像にありました。しかし、異性愛者という性的指向、男女というジェンダー・アイデンティティのありようや、個々人の生物学的・解剖学的特徴など、実はひとつひとつの次元（要素）

がそれぞれに多様であるということが可視化されるほどに、多様な家族のありようやそのニーズもより明らかになってくることでしょう。

しかし、たとえば国の科学研究費助成事業による国内初のLGBTに特化した意識調査（性的マイノリティについての全国調査：意識と政策）においても、同性同士の結婚に積極的に「賛成」と回答したのは全体の14.7%であることが明らかになりました。積極的に反対ではない人でも、「妊活」や子育てには反対という人の数はさらに増えることでしょう。トランスジェンダーの人たちに戸籍上の性別変更することを可能にする「性同一性障害特例法」においても、その要件として未成年の子がいてはいけなとか、生殖能力を永続的に欠く状態でなければダメだと明記されています。これが国連をはじめとする国際機関が問題視する人権侵害事例であつても、国内ではなかなか改正に議論は盛り上がりません。

そこで今期は、性の多様性に関する最新知識、婚姻・パートナーシップ制度をめぐる国内外の動向、生殖技術がもたらす可能性と課題などを踏まえ、従来の思い込みを見直す方向で「家族」について考えるための3回の連続講演会を開催しました。またこれに併せて、少人数でのセミナーも開催し、多数の方々の熱心な参加をいただくことができました。

この連続講演会記録集が、今後のさらなる議論の発展に寄与することを願ってやみません。

2016年3月31日

コーディネーター：東 優子（本学教員 女性学研究センター）
熊安貴美江（本学教員 女性学研究センター）